

ぐではどうしてもうまくだせませんでした。いくらかいてもかいてもほんとうの景色で見るような色にはかけませんでした。

ふと、ぼくは学校の友だちのもっている西洋えのぐを思い出しました。その友だちはやはり西洋人で、しかもぼくより二つくらいとしが上でしたから、身長は見あげるように大きい子でした。ジムというその子のもっているえのぐはくらの上等のもので、かるい木はこの中に、十二種のえのぐが小さなすみのように四角なかたちにかためられて、二列にならんでいました。どの色も美しかったが、とりわけてあいと洋紅とはびっくりするほど美しいものでした。ジムはぼくより身長が高いくせに、絵はずっとへたでした。それでもそのえのぐをぬると、へたな絵さえがなんだか見ちがえるように美しく見えるのです。ぼくはいつでもそれをうらやましいと思っていました。あんなえのぐさえあればぼくだって海の景色をほんとうに海に見えるようにかいてみせるのになあと、じぶんのわるいえのぐをうらみながら考えました。そうしたら、その日からジムのえのぐがほしくってほしくってたまらなくなりました。けれどもぼくはなんだかおくびようになってパパにもママにも買ってくださいとねがう気になれないので、まい日まい日そのえのぐのことを心の中で思いつづけるばかりでいく日か日がたちました。

いまではいつのころだったかおぼえてはいませんが秋だったのでしよう。ぶどうの実がじゅくじゅくしていたのですから。天気は冬がくるまえの秋によくあるように、空のおくのおくまで見すかされそうにはれわたった日でした。ぼくたちは先生といっしょにべんとうをたべましたが、その楽しみなべんとうのさいちゅうでも、ぼくの心はなんだかおちつかないで、その日の空とはうらはらに暗かったのです。ぼくはじぶんひとりで考えこんでいました。たれかが気がついて見たら、顔もきつと青かったかもしれせん。ぼくはジムのえのぐがほしくってほしくってたまらなくなってしまうのです。胸がいたむほどほしくなってしまうのです。ジムはぼくの胸の中で考えていることを知っているにちがいないと思って、そつとその顔を見ると、ジムはなんにも知らないように、おもしろそうにわらったりして、わきにすわっている生徒と話をしているのです。でも、そのわらっているのがぼくのことを知っていてわらっているようにも思えるし、なにか話をしているのが、「いまに見ろ、あの日本人がぼくのえのぐをとるにちがいないから。」
といているようにも思えるのです。ぼくはいやな気持ちになりました。けれどもジムがぼくをうたがっているように見れば見えるほど、ぼくはそのえのぐがほしくてならなくなるのです。

二

ぼくはかわいい顔はしていたかもしれないが体も心もよわい子でした。その上おくびょうもので、いいこともいわずにすますようなたちでした。だからあんまり人からは、かわいがられなかつたし、友だちもないほうでした。ひるごはんがすむとほかの子どもたちはかっぱつに運動場にて